

莓パニック 4

～北の国編～

1 気になる準備 (苺)

クリスマスが過ぎ、日常が戻ってきた。ここは鈴木苺のワンルームマンション。わけあって、彼女の勤め先の宝飾店の店長である、藤原爽もここに寝泊まりしている。

苺は寝起きが悪く、朝の身支度を終え、玄関に向かうときになっても、まだ寝ぼけていた。

「鈴木さん。ほら、ちゃんと歩いて」

苺が今日もなんとか起き出して玄関へと向かっていると、店長さんから叱責が飛んできて、反射的に「はい」と返事をした。

「ふわわあ〜」

まだ頭がぼんやりしている。

「……ちゃんとして。いい加減、目を覚ましなさい」

背中をパンと叩かれ、その勢いでつんのめりそうになる。

「危ないー!」

叫び声と同時に、力強い腕に支えられた。がちちりと自分を抱えてくれている。

「まったく、この寢覚めの悪さには、ほとほと呆れますね」

苺は眉を寄せた。まったくはこっちの台詞だつての。危うく転びそうになったじゃないか。

「ついに起きましたか？」

「ついに起きたですよ」

店長さんのきつい口調を真似して答えつつ、今朝のいきさつを思い出す。

店長さんに乱暴に起こされたこと……急かされて顔を洗ったこと……トイレに入っていると、早く出て来いと怒鳴られたことなど。

「朝ご飯……食べてないですよね？」

玄関で靴を履きながら、苺は自分のお腹を撫でて言った。

食べた記憶がないし、お腹も空いている気がする。

「食べていませんよ」

「ですよね。なんで……」

なぜ朝ご飯を食べないのか質問しようとしたが、もしかして自分が大寝坊をしたのではないかと不安になり、「いま何時なんですか？」と問う。

「七時半ですよ」

「へっ?」

七時半? まだ七時半なのか?

「寝坊したのかと思って、焦っちゃったじゃないですか」

頬を膨らませて文句を言う。

「予定を変更したのですよ」

「予定を変更?」

「あの……」

「朝食は私の屋敷で食べます」

苺は唇を尖らせた。またかという気持ちだ。

店長さんときたら、いつだって急に言うんだからなあ。

でもそっか……店長さんの家で朝食か……

たぶん店長さんの屋敷で執事頭を務める吉田の善ちゃんか、料理長さん……つまり、ボスシェフさん、お屋敷で食べませんかと誘われたんだろうな。

ちよつと胸が弾んできた。店長さんの家で朝食つてのは悪くない。ボスシェフさんも善ちゃんも好きだし……

だけど、店長さんの祖母である羽歌乃おばあちゃんのお屋敷に行くのは、もうこりこり。

一昨日のことを思い出し、顔が歪む。苺は羽歌乃おばあちゃんに、ろくでもないクリスマスプレゼントをあげてしまったのだ。それは、店長さんにおかしな贈り物をプレゼントされた仕返しとして用意したものだったのだけど……成り行きで羽歌乃おばあちゃんの手渡ってしまった。

……おばあちゃんの機嫌を、きつと損ねてしまつてるだろうな。困つたなあ。

店長さんの車に乗ると、あつという間にお屋敷に着いた。玄関には微笑みを浮かべた藍原要あいはらかなめさんがいて、苺はちよつとびっくりさせられた。ちなみに藍原さんは、店長さんの部下で、苺の勤める宝飾店の先輩だ。

「お帰りなさいませ、爽様」

なんで善ちゃんじゃないんだろう？ 執事頭である善ちゃんが出迎えてくれるものと思っていたのに……

あつ、そういえば一昨日、屋敷をあとにする苺たちを見送ってくれたとき、なんか調子が悪そうだったけど……やっぱり、具合がよくなかったんじゃない？

「あ、藍原さん……」

「鈴木さん、おはようございます」

「は、はい。おはようです。あの、なんで藍原さんが？ 善ちゃんはどうしたんですか？」

心配になって尋ねると、藍原さんはやわらかな笑みを浮かべる。

「吉田さんは、少々急ぎの用があまりまして」

「そうなんですか？」

どうやら具合が悪いわけではないらしい。苺はほつとした。

「さあ、朝食の用意はできております」

藍原さんは急かすように言い、さつさと歩き出した。店長さんは無言でそのあとをついてゆく。機嫌でも悪いのだろうか？ 苺は店長さんの神経を逆撫でしないよう、そつと話しかけた。

「店長さん、なんでしゃべんないんですか？」

苺の問いに、店長さんは視線を投げてきた。

「別に理由などありませんよ。ただ……」

「ただ？」

「いまは仕事のことと頭がいつぱいなのですよ」

ああ、仕事か……

確かにいま店長さんは、かなり忙しいようだ。

それなのに昨日の午前中も、いきなり苺のパスポートを取るために半日潰つぶしたりして……

まったく、よくわからない店長さんだよ。余計なことしないで、仕事をすればよかったのにさ。店長さんって、要領がいいのか悪いのか、わっかんないな。

藍原さんが通してくれたのは、店長さんの部屋だった。テーブルにサンドイッチと紅茶の用意がしてある。

テーブルに店長さんと向かい合って座るなり、すぐさま食べ始めるよう藍原さんが急かしてきた。

店長さんと藍原さんの様子を気にしつつも、苺は彩いろどりよく盛りつけてある一口サイズのサンドイ

ッチを手に取り、頬張る。

おお、うまいっ！

「準備は抜きなく整いそうか？」

クリーミーなチーズサンドに舌鼓したつづみを打っていると、店長さんが藍原さんに声をかけた。

「はい。いまのところ問題はありません」
「そうか」

店長さんは返事をしながら、俯うつむいて不審ふしんな動きをしている。
店長さんの手元をこっそり窺うかがった苺は、思わず目を見開いた。
そ、そいつは、苺が昨晚握にぎった三つのおむすびじゃないか。

……こんなところにまで持ってきていたとは。

店長さんがおむすび好きだっことは知っているが、こんな贅ぜい沢たくなサンドイッチを前にして、な
んで苺のおむすびを食べようとするのか、わけがわからない。サンドイッチのほうが絶対美味し
いのになさ……

そんなの食べないで、こつちを食べた方がいいですって……と言いたくてたまらなかつたが、や
めておいた。過去に何度も同じやりとりをしているのだ。店長さんがなんと答えるかなんて、たや
すく想像できる。

店長さんがおむすびを食べ始めたところで、側に立っていた藍原さんが分厚いファイルを店長さ
んの前に置いた。すると店長さんは、おむすびを頬張りながら片手でそのファイルを捲めり、目を通
してゆく。

「なんか、めっちゃ忙しいみたいですね？」

苺は、手で合図を送って藍原さん呼び寄せ、店長さんに聞かれないよう、声をひそめて話し
けた。

「忙しいですよ」

藍原さんに話しかけたのに、答えたのはファイルを見ている店長さんだった。

「では、私は所用がありますので。鈴木さん、なるべく早く食べ終えてくださいね」

いつもはやさしいのに、藍原さんは珍しく釘を刺すように言い、部屋を出て行った。

閉じたドアをポカーンと見つけているうちに、なんだか笑いが込み上げてきた。

だっていまの藍原さんの口ぶり、まるで店長さんのようだった。

口元に笑みを浮かべ、苺は店長さんに視線をやった。

店長さんはファイルに集中している。話しかけたら邪魔になってしまっただろう。

藍原さんが何をしに行ったのか気になるが……ここは言われたとおり、さっさと食べ終えよう。
それにしても、こいつはうまいな。

苺はサンドイッチの美味しさに相好さうごうを崩した。

2 遊び過ぎの代償 〈爽〉

指についたご飯粒を口に入れ、爽は次のおむすびを手を取ろうとした。だが、お目当てのものが
手に触れない。

うん？

ファイルから目を上げ、机の上を見る。そこにはおむすびが包んであったラップしかなかった。おむすびは三つあったはずだ。ひょっとして、もうすべて食べてしまったのだろうか？ まるで記憶がない。

爽は目の前にいる苺に視線を向けた。苺はもぐもぐと口を動かしている。

じーっと見つめていると、爽の視線に気づいた苺は、動揺したように目を泳がせた。苺と目が合う。

……まさか苺が？

「鈴木さん、何を食べているんです？」

「はい？ もちろんサンドイッチですよ」

これこれというように、サンドイッチを指す。嘘はついていないようだ。つまり……私は知らぬ間に、おむすびをすべて食べ終えてしまったのか？

味わった記憶がなくて、がっかりする。

「あの、店長さん？ どうかしたんですか？」

「いいえ……なんでもありませんよ」

そう言ったが、苺は納得できないという顔をしている。

「苺に何を食べているのかって聞いたとき、まるで犯罪者を見るような目をしてましたけど？」

普段は鈍いくせに、今日はずいぶんと鋭いじゃないか。

彼女の疑いの目を逸らそうと、こじつけの答えを返す。

「サンドイッチには種類がいくつもあるでしょう？ 貴女がとても美味しそうに食べているので、どれなんだろうと思ったのですよ」

苺が指さしたあたりのサンドイッチを手に取り、爽は口に入れた。

「うむ、美味しいですね」

「でっしょう？ 口の中でチーズがふわって感じでとろけちゃうんですよお。お野菜もたっぷりで、めっちゃ美味しいですよね。……なのに店長さん、どうしておむすびなんか食べてるんですか？ もったいない」

もったいない？ どうやら苺は、自分の作ったおむすびの美味しさをわかっていないようだ。

「苺、もう食べ終わりましたよ」

ティーカップを置いた苺は、得意そうに声を上げた。先に食べ終えたことで、私に勝った気でいるらしい。勝負などしていないのに……

まあ、なるべく早く食べ終えるよう、要が釘を刺していたからな。

苺が両手を合わせて「ご馳走様でした」と言い、爽もカップに残った紅茶を飲み干した。さて、出掛ける支度に取りかかるとしよう。爽は携帯を取り出し、吉田に電話をかけた。

「はい。爽様」

爽は「どうだ？」と尋ねたが、吉田の落ち着き払った第一声で答えはおのずと知れた。

「準備は着々と進んでいます」

予想通りの返事に「そうか。では引き続き頼む」と言い、通話を終える。

「店長さん」

携帯をポケットにしまっていると、苺が呼びかけてきた。

「なんですか？」

「急がなきゃいけないんじゃないんですか？ 藍原さん、なんだか慌てていたみたいだし……」
様子を窺うように聞いてくる。このあとに何が待ち受けているのかわからないのが、落ち着かないらしい。

「準備はつつがなく進んでいますよ」

「なんの準備なんですか？」

はぐらかそうとしたのに、苺は突っ込んでくる。

「店長さん、お仕事、すつごく忙しいんでしょう？ もう遊んでちゃ駄目ですよ」

爽は眉を上げ、苺を見つめた。

「私は遊んでなどいませんが？」

「時間をいっぱい無駄にしたじゃないですか。ほら、パスポートの手続きとか……それで仕事がたまっちゃったんでしょう？」

確かに苺の言うとおりだ。ここ最近、自分は苺で遊び過ぎている。だが、無駄な時間を過ごしたとは思っていない。

「無駄とは言われたくありませんね」

「はい？」

「無駄とは思っていません。いまこういう形で遊び過ぎた代償を払うことになっているとしても……好きでそうしているのですから、構わないでしょう？」

「ま……まあ、そうかもですけど……無理をし過ぎて倒れちゃうかもしれないですよ」
「体調管理はちゃんとしていますから、ご心配には及びませんよ」

素っ気なく返すと、苺がむっとする。せつかく心配してやっているのに、とても思っているんだろう。

ドアがノックされたあと、「爽様」と要の声がした。てつきり準備を終えた吉田が来ると思っていたので、いくぶん戸惑う。

「入れ」

返事をする、要が大きな箱を抱えて入ってきた。もちろん爽はその箱の中身を知っている。

苺は箱に興味津々な眼差しを向けていた。

爽は何も言わずに要に歩み寄り、箱を受け取った。

「吉田はどうしたんだ？」

「靴を用意なさっています。サイズがないので」

「ああ、そうか。それで、用意できるのか？」

「はい。何がなんでも、お持ちすることでした」

要は苦笑しつつ報告する。思わず爽も笑ってしまった。

「鈴木さん、こちらにいらっしやい」

爽は苺を促して部屋を出た。

「はーい」

間延びした返事をしながら、苺は素直についてくる。

空いている部屋に移動し、爽はすぐさま箱の蓋を開けた。そして、ひととおり中身を確認する。

「ほほお、これに着替えるつてんですね？」

隣にいる苺が覗き込みながら聞いてくる。

爽は苺に向き直った。

「ええ。十分以内に着替えを終わて下さい」

命じるように言うと、苺は「五分もかからないですよ」ときつぱり言う。

「おや、そうですか？」

「だつて着替えるだけだし……」

苺は服を取り出しながら言う。

「へーっ、黒いジャケット……ですか？ あれれっ？」

ジャケットを手にしたまま箱の中に視線をやった苺は、戸惑いの声を上げた。

「これつて、ネクタイ？ お、およっ？ これつてえ？」

箱の中身を片手で引つ掻き回していた苺は、入っているものに困惑したようだった。

さて、あれこれ聞かれる前に、この場から去るとしよう。

爽はさつさとドアに向かう。

「ちよ、ちよつと待つてくださいいよ、店長さん！ これはなんなんですか？ また遊ぶつもりなんですか？ 仕事忙しくて、そんな暇ないんじゃ……」

焦つて言葉を投げってくる苺に、爽は背を向けたまま軽く片手を振った。

「遊びなどではありませんよ。では明言どおり、五分以内でお願いしますよ」

「で、でも……これも被るんですか？」

「ええ。五分以内に」

返事をした爽は、にやつきながら部屋をあとにした。

3 どっちも失礼 〔苺〕

閉じたドアを、苺は睨みつけた。

まったく店長さんときたら、いったい今日は何を企んでいるんだろう？

思い切り頬を膨らませ、手にしたブーツを見つめる。

こいつはカツラだ。着替えるようにと言われた服と同様に真っ黒。黒くないのは、シャツだけ。

こんなものを苺に着せて、ほんとに何をするつもりなんだろう？ さつぱりわからないが、王様店長さんに命じられた以上、着替えるしかない。部下は上司に逆らえないのだよ……

でも……五分でだよ？ 十分つて言われたタイムリミットを半分にしちゃったのは自分だ。

まさか、カツラまで用意されてるなんて思わなかったからさあ。
ひとりになった部屋でぶつぶつ文句を言いつつ、苺は急いで着替え始めた。

あーっ、駄目だあ。五分なんて言うんじゃないよ。
スーツは着られたのだが、ネクタイが結べないのだ。カツラもうまくつけられない。
どうしてもカツラの脇から地毛が出てしまう。なんとかしようと弄じっているうちに、超イライラしてきた。

「もおおっ！　こんなの難し過ぎるよ！」

苺は、地団太じだんたを踏んでカツラを頭から引っぺがし、思い切り投げた。

「う……」

バシツという音とともに、くぐもった声が聞こえ、ぎよっとする。

ちょうど店長さんが部屋に入ってきたところらしく、顔にカツラがくっついていていた。

「ああっ」

弁明べんめいしようと口を開いたが、カツラを顔に張りつけた店長さんは、滑稽こまつけとしか言いようがないわけ……

「ぶふっ」

思わず噴ふき出した苺は、慌あわてて口を塞ふさいだ。

「鈴木さん」

低い声で呼びかけられ、気が動転した苺は逃げ場を探した。だが残念ながら、どこにも逃げられない場所はない。苺は、ゆっくりと迫ってくる店長さんを前に震え上がった。

「び、ごめんです。わざとじゃないですよ」

身を縮ちぢめ、両手を合わせて謝罪する。

「ほら、ここに座りなさい」

雷が落ちるものと覚悟していた苺は、普通に話しかけられてほっとした。

大人しく、指示された場所に腰かける。

すると店長さんは黒いネットのようなものを箱から取り出し、慣れた手つきで苺の頭に装着した。そしてカツラを被かぶせる。

「へえーっ。店長さん、うまいんですね？」

「色々と経験していますからね」

「カツラを被る経験ですか？」

「色々ですよ。さあ、できました。立って背筋を伸ばしてください」

「はいっ」

苺は返事と同時に立ち上がり、背筋を伸ばす。すると店長さんはネクタイを手にし、あつという間に苺の襟元えりもとに結んでしまった。

「まあまあ……というところですね」

店長さんは苺の全身を眺めて言う。

「こんな格好をさせて、苺に何をしろって言うんですか？」

「我々についてくるだけですよ」

「我々？」

「ええ」

店長さんに手を取られ、苺は部屋から出た。

「要、どうだ？」

店長さんは苺を藍原さんの正面に立たせて尋ねる。藍原さんは楽しそうな笑みを浮かべた。

「よろしいのでは」

「まあ、完璧からは程遠いが、それもまた一興いっせいだろう」

なんだか面白くないお言葉をいただき、苺はちよいとむっとした。

「一興ってのはなんですか？ 嬉しくないんですけど……遊びじゃないんですよね？」

疑念が湧いた苺は改めて確認する。

「遊びでは……まあ、鈴木さんが参加しては、遊びになってしまいそうですが……悪いことではないですよ。お前もそう思うだろう、要？」

「はい。悪くありませんね。私も楽しみになってきました」

藍原さんが澄すました顔で言うと、店長さんは少しばかり面白くなさそうな表情をしたが、すぐに気を取り直した様子で、「それはよかった」と素っ気なく返した。

「それで、吉田からはまだ……」

店長さんがそう言ってドアに視線をやった途端、待ちかまえていたようにドアがノックされた。

続いて「爽様」という声が聞こえてくる。

「あつ、善ちゃんだあ」

大好きな善ちゃんの声が聞こえ、嬉しくなった苺は、ドアにすっ飛んで行ってパツと開けた。

「善ちゃん、おっはよう」

善ちゃんは驚いた様子だったが、すぐに相好そうごうを崩した。

「鈴木様。おはようございます」

深々と頭を下げた挨拶する。顔を上げた善ちゃんは、今度は店長さんに恭うやうやしく声をかけた。

「爽様、お待たせいたしました」

「ああ。鈴木さんに渡してくれ」

善ちゃんは手にしていたものを苺の足元に置いた。

いま着ている黒いスーツに合わせたらびつたりの黒い靴だ。

苺はさっそく靴を履いた。

「鈴木様、履き心地はいかがでしょう？」

「いいですよ。ちょうどいいサイズです」

「吉田が、貴女に合うものを探し出してくれたんですよ」

店長さんに声をかけられ、苺は笑みを浮かべる。

「そうなんですか？ 善ちゃん、ありがとうございます」

お礼を言ったものの、なんとなく腑^ふに落ちない。もちろん善ちゃんが莓のために奔走^{ほんそう}してくれたことは嬉しいが、莓は別にこの靴が欲しかったわけではない。善ちゃんにお礼を言うのは、どちらかというと店長さんのほうだ。

「うーむ。やはり背丈が……」

店長さんが独り言のように呟^{つぶや}いたので、莓は首を傾^かげた。

「背丈？」

「もう十センチほど欲しいところですが……これでよしとするしかありませんね」

「大きくなるクッキーでも出してくれれば、食べますけど」

ちよいと皮肉^{くわ}っぽく言つてやると、店長さんはくすつと笑った。

「魔法のクッキーは、残念ながら持ち合わせていません。さあ、行くでしょう」

最後の台詞^{セリフ}は、この場にいる全員に向けられていた。

善ちゃんに行つてきますと告げ、外に出ると、エントランスに大きな黒い車が横付けされていた。これを出掛けるらしいが……

こんな格好をさせられた時点でわかつてはいたが、今日は宝飾店の仕事のほうは休むらしい。

できれば、あんまり休みたくないんだけどなあ。店長さんに付き合わされて、サボつてばかりいる気がする。

「鈴木さん」

車に向かつて進もうとすると、背後から藍原さんに呼びかけられた。足を止めて振り返る。

「わっ!」

莓は思わず叫んだ。

藍原さんは真っ黒なサングラスをかけていた。黒いスーツと相まって、まるで要人警護をする

SP^{スペシャル}って感じだ。

うひょーっ、かっこいい!

そういうえば藍原さんは朝から黒いスーツを着ていたっけ? サングラスをかけるまで、莓^莓ってば気づかなかったよ。

ありやっちゃっ? よく考えたら、いまの莓の格好って、藍原さんとよく似てる……

そんなことを考えていると、目の前にすつと黒いものを差し出された。

「えっ、サングラス? い、莓もこいつをかけるんですか?」

「ええ。きつとお似合いになりますよ」

そ、そうだろうか? これをかけたら、莓も藍原さんのように、かっこいいSPに見えるかな?

莓はわくわくしながら、サングラスをかけた。そして店長さんに尋ねる。

「店長さん、莓はどうですか?」

「……」

暗くなつた視界に映る店長さんは、莓を見つめるばかりで何も言わない。

「店長さん?」

「……ノーコメントで」

「ええっ！　なんでですか？」

不満をたつぷり滲ませて言っていると、藍原さんがここにこしながら声をかけてきた。

「お似合いですよ。いまの鈴木さんは、私のおまけのようです」

「はいっ？」

苺がぼかんとしている間に、藍原さんは車に向かってスタスタと歩き、助手席に乗り込んだ。

啞然としていた苺だが、ボタンと車のドアが閉まる音で、我に返る。

隣にいる店長さんの腕を、思わずガシツと掴んだ。

「い、いま……なんか、藍原さんに超失礼なことを言われた気がするんですけど？」

「ええ、気のせいではありませんよ」

あっさりと言定した店長さんは、「ほら、貴女もさっさと乗りなさい」と後部座席に苺を押し込んだ。

車が走り出すと、隣に座った店長さんはくすくす笑い出す。

「笑わないでくださいよ！」

「止まらないのですよ。まったく腹立たしいですね」

先ほどから店長さんは、無理やり着替えさせたくせにノーコメントと言ったり急に笑い出したり、

意味深な行動ばかり。苺は苛立ち、声を荒らげる。

「はあっ？　どういう意味ですか？」

「要にしてやられたようで、面白くないんですよ。……おまけ……ね」

　　またもや派手に噴き出す。店長さんは一向に態度を改めないし、藍原さんは苺を自分の添え物みたいに言うし……

　　まったく、どつちも超失礼だ。

　　むかついた苺は、めいっばい頬を膨らませたのだった。

4 自信満々なおまけ　〈爽〉

　　まったく要のやつめ……

　　苺にサングラスを用意するようにと言ったのは、この自分だ。黒いスーツを着せても、背の低い彼女では威圧感が足りない。それでサングラスでもかけさせてみるかと思いついたのだ。

　　けれど、サングラスをかけた苺を見ると、どうにも笑いが込み上げてならない。黒服に短髪の黒いウィッグ、そしてサングラスという、男っぽいスタイルなのに……ぷーっと頬を膨らませる苺は、まるで中学生くらいの男の子がふて腐れているようにしか見えない。

　　爽は苺から目を逸らし、居住まいを正して腕を組んだ。

　　今日は一日かけて、経営している店舗を視察することになっている。

　　苺を連れていくつもりはなかったのだが……要から、苺も視察に同行させてはどうかと提案されたのだ。

元々、店に苺を残して行くのが心配だったから、その提案はすぐに採用した。だが、普段の苺と一緒にいたら、視察の場に必要ない緊張感が薄まってしまおう。それで要と同じ服を着せることにしたのだが……

爽はもう一度、苺の姿を見ようとしたが、やめておいた。また笑いが止められなくなりそうだ。まあ、黙っていさえすれば、それなりに威圧感を漂わせられる……かもしれない。

爽は鞆からあるものを取り出し、苺を呼んだ。

「鈴木さん」

「はい」

「これを」

「なんですか、これ？」

苺に渡したものは、書類の束が挟んであるクリップボードとペン。

「これから、ここにリストアップしている店舗を回りますから、貴女は調査票の空欄を埋めてください」

「調査票……？」

苺は首を傾げつつ、書類に目を通す。

「難しく考えなくていいんですよ。鈴木さんが感じたことをそのまま書いてくださればいいんです」

「店の第一印象。店内の様子。スタッフルームの様子。店員の接客態度。その他気になるところ？」

苺は書いてあるとおりに読み上げる。爽は頷いた。

「私が店の者たちと話をしている間、貴女は自由に店内を回って、その項目について感じたことを記入して下さい」

「ふーん」

何を考えているのか、苺は不思議な反応をする。

「それと……私がいいと言うまで、しっかりと口を閉じていなさい。口を開いていると、間抜けに見えるますからね」

「ま、間抜け？ 店長さん、失礼ですね」

「気を抜いてほしくないのですよ。私の補佐としてついてくる以上、きちんとやってくれなくては困りますからね」

「補佐？ 苺、店長さんの補佐なんですか？」

「ええ。要と同じ立場です」

「へーっ。藍原さんと同じですか。な、なんか苺、急にお偉くなったみたいで、ドキドキですよ『お偉く』という言葉に軽く噴きそうになったが、爽は顔をしかめて堪えた。

「了解ですよ。SPには沈黙が似合いますよね。苺、精一杯、務めますよお」

は……SP？

おやおや、ずいぶんと大きく出たものだな。とても護衛している者には見えないが……まあいい。ならば、SPらしく振舞おうとする苺を見て、楽しませてもらうとしよう。

最初の視察を終え、車に戻った爽は、ぐつたりと座席にもたれた。笑いを堪えずに疲れるなんて、初めての体験だ。要も必死に笑いを堪えていた。

……ああ、駄目だ。

「ぶ、ぶふっ」

口を閉じたまま噴き出し、おかしな音を出してしまった。慌てて手のひらで口を塞ぐ。

「店長さん、どうし……あつ、い、いまはしゃべってもいいですよね？」

爽は口を塞いだまま頷いた。苺はほっとした様子で、胸に手を当てる。

「よかった。それで、どうしたんですか？ むせちゃったとかですか？」

「え、ええ……。それより鈴木さん、上出来でしたよ」

店の者たちは苺の存在に、おおいに困惑させられていた。

クリップボードを手に、店内を無言で闊歩する彼女に、どう対応すればいいかわからなかったようだ。苺に対してひどく緊張していて、それを見ているだけで笑えてならなかった。

もちろん大事な視察だ。いつものように厳しく意見した。

「えへへ。実は苺も、なかなかだったと思うですよ」

照れくさそうに、黒いサングラスをかけた苺が言う。黒服、短い黒髪もそのままだ。

正直、腹を抱えて笑いかけた。

「ちゃんとお役に立てたですか？」

「おやおや、鈴木さん、気が早いですね。評価はすべてが終わってからですよ」

「それはそうですね。それで、あと何店くらい視察するんですか？」

「聞かないほうがいいですよ。先は長いとだけ言っておきましょう」

「どんと来いですよ。苺、コツは覚えたし、もうしつかりやれるですから」

これ以上、笑わさないでほしい。

自信満々に言う苺の口を塞いでやりたかった。

5 癒しの力と、ドキンな触れ合い 〈苺〉

店長さんの視察のお供として、たくさんの店舗を回った翌日。

朝からお店に出勤した苺は、固く絞った雑巾で床を拭いていた。ピカピカになった床を見て笑みを浮かべる。それから屈めていた身体をよっこいしょと起こす。

スタッフルームの掃除が、ようやく終わった。

今日は十二月二十八日。暮れが間近にやってきたため、苺は朝から大掃除をしている。

店長さんは、応援のスタッフさんと店頭に出ている。

昨日の視察が終わったのは、なんと夜の九時過ぎ。さすがに最後に行ったお店では、頭がぼんやりしてしまった。

変装してお仕事をさせられるなんて、思ってもいなかった。でも、すごく楽しかった。藍原さんとお揃いのスーツを着て、カツラを被り、サングラスまでかけたのだ。

調査票には、思ったことをそのまま書いた。少しは役に立つといいなあ。

まあ、それよりいまは掃除に専念しよう。さて、今度は……どこをピカピカにしよう？

給湯室は最後にして、次は、苺専用の更衣室を片づけようか。バケツと雑巾を持って、更衣室に入る。

部屋の三分の一は備品で埋まっているが、綺麗に積んであるから雑然とした印象はない。素敵な家具が置いてあって、更衣室というより誰かの私室という感じだ。一人で使うにはもったいないくらい、贅沢な部屋。この部屋の隣には男のひとたちの更衣室があるが、そちらは入ったことがない。そっちの大掃除は後日、藍原さんと岡島怜さんがやるから、苺はやらなくていいと言われた。先輩にやらせるなんて申し訳ないけど……男のひとの更衣室には入れないもんね。

その藍原さんは、今日はお休み。岡島さんはお昼からやつてくる予定になっている。

なんでか知らないけど、スタッツさんは男のひとばかりなんだよね。店長さんのお屋敷でも女性のスタッツさんは見たことがないし。……もしかして、ひとりもないのかな？ たまたま苺が見ていないだけ？

考え込んでいた苺は、ドアをトントンとせっかちに叩く音を耳にして振り返った。

「は、はい」

「鈴木さん」

店長さんの声だ。どうも機嫌がよくなさそうだ。

苺は急いでドアを開けた。

「なっ、なんですか？」

「もう十時過ぎていますよ。お茶の準備はどうしたんです」

店長さんは叱責するように言ったあと、さっさと店頭に戻っていく。

ちえっ！

一生懸命掃除をしてたから、お茶の時間を忘れてただけなのにさ……

苺は頬を膨らませて給湯室に向かった。

ほんと、意地悪店長さんだよ。というか、意地悪継母！

内心でぶつぶつ文句を言っていた苺だったが、ある考えに思い至り、にはっと笑った。

いまの苺って、ちよつとシンデレラみたいじゃないか？

雑巾持たされて、汗水たらして床拭いたり、お茶淹れたりさ。

むふふ。

……てことは、意地悪な義理の姉たちは藍原さんと岡島さん？

いやいや、それは違うな。

あのおふたりは、ぜんぜん意地悪じゃない。とつてもやさしい。そんな役をあてがうのは失礼だ。

やっぱ、意地悪姉には……健太と剛が適任だな。

兄の健太は現在妊娠中のお嫁さんのお美さんにはやさしいが、妹の苺のことは「いちごう」と呼び、子分扱い。幼馴染の二ノ宮剛も、顔を合わせれば憎たらしいことばかり言ってくる。

うん、このふたりが適役だ。にやついていた苺は、眉を寄せて考え込んだ。
なら、王子様は？

王子様ねえ……？

頭にぼんと店長さんが浮かび、苺は唇を尖らせた。

ダメダメ。店長さんは、意地悪継母役だもん。

そう思うのに、店長さんはなかなか王子様役から降りてくれない。

やれやれ……店長さんつてば、苺の脳内ですら、超わがままだよ。

苺は苦笑をもらした。

お茶を淹れて休憩したあと、苺専用の更衣室の掃除を済ませる。昼食を挟んでからは給湯室の掃除に取りかかった。

ここは細々とした物が多く、それらをどかしながら掃除をするので手間がかかる。

掃除に没頭していた苺は、ドアの開く音を耳にし、屈めていた身体を起こして振り返った。

「ああ、鈴木さん、ご苦労様です」

「あつ、岡島さん」

苺は給湯室にずっといたので、昼過ぎにやってきた岡島さんとは、まだ顔を合わせていなかった。

「もう休憩の時間になっちゃったですか？」

そんなに時間が経ったのかと驚く。

「まだ二時半です。爽様から今日はシフトの都合で、先に休憩を取るよういわれたのですよ」

「そうなんですか。……そいじゃ、お茶の準備しますね」

「いえ。鈴木さんは掃除のほうで手一杯でしょう。自分でやりますから」

「大丈夫ですよ。すぐに支度しますね。もう一人のスタッフさんも一緒に休憩するですか？」

「ええ……ですが、本当にお任せしてよろしいのですか？」

岡島さんは、掃除の途中で散らかっている給湯室を見回しながら言う。

「もうここだけなんです。夕方までには終わらせられるですよ。苺、紅茶もコーヒーもうまく淹れられるようになったんですよ」

苺は岡島さんに飲みたいものを尋ね、すぐに準備にとりかかった。

彼はまだ、給湯室の入口に立っている。

「今日も履いてくださっているんですね」

ほい？

食器棚からティーカップを取り出していた苺は、岡島さんの視線をたどった。苺の足元を見ている。ああ、このブーツのことか。藍原さんと岡島さんから、クリスマスプレゼントにもらったピンクのブーツだ。ボンボンがついていて、とっても可愛い。今日はこのブーツに合わせて、水色のメイド服を着た。

「はい。もう、すつごく気に入ってるですから。これを履いてるだけで、ハッピーな気分になれるやいます」

岡島さんは目を細めて頷く。

こうして見ると、やっぱり女のひとみだ。

「どうかしましたか？」

顔をじつと見つめ過ぎたらしい。戸惑い気味に聞かれ、苺は笑って、なんでもないと手を振った。

「岡島さん、綺麗だなんて思ってた」

「あ……ど、どうも。ですが、あまり喜ばません」

頬をほんのりと赤く染めた岡島さんは、困ったように言う。

艶つぽい表情になり、苺はちよつとドキリとしてしまった。

そっか……綺麗というのは、男性にとつては褒め言葉にならないのかな？

「もつと男らしい顔つきになりたいんです……」

岡島さんの発言に、苺は思わず「ええっ！」と声を上げた。

そんな、もつたいない。

「私が男らしい顔つきになりたいと望んでは、おかしいですか？」

「おかしくはないですよ。岡島さんはいまのままで十分素敵だから、驚いちゃって。それに男らしいさは見た目とは関係ないですよ。内面が男らしくなければいいんじゃないですか？」

岡島さんは苺をじつと見つめたあと、ふわつとやわらかな笑みを浮かべた。

「おつしゃるとおりですね。鈴木さん、ありがとうございます」

岡島さんは軽く頭を下げ、給湯室から出て行った。

なぜ、お礼を言われたんだろう？

苺はお茶の支度をしながら、首を傾げた。

岡島さんたちが休憩を終え、入れ代わりで店長さんと苺が休憩に入った。

飲み物を持ってスタッフルームに行くと、例の如く店長さんはパソコンに張りついている。ずいぶん忙しそうだ。店長さんが経営しているのは、この宝飾店だけじゃないんだから、忙しくて当然だよ。

「店長さん」

苺は、瞬きもせず集中している店長さんに、そつと声をかけた。

「はい」

店長さんはパソコンの画面を凝視したまま、上の空で返事をした。

「コーヒーどうぞ」

パソコンの横にコーヒーを置き、苺は店長さんの真向かいに座った。

苺は自分用にハーブティーを淹れた。この給湯室には何種類もの茶葉があるから、苺は色々試して楽しんでいる。

いろんな茶葉を、自分の好みでブレンドできるということも店長さんに教わった。

午前中に飲んだのは黄色っぽかったけど、これは赤い。一口噉くはった苺は、「す、すっぱ！」と思わず叫んだ。

「ハイビスカスですか？」

苺が手にしているカップを見つめ、店長さんが言う。

「あ、はい」

一目見ただけで当てちゃうとは、びっくりだ。

「なんか、南国に行った気分になれるかななんて思っただけで、葉をたっぷり入れすぎちゃいました」

「頭がスッキリしそうですね。鈴木さん、一口いただけますか？」

「それじゃ、すぐに淹ひれて……」

立ち上がるうとすると、店長さんが止めた。

「鈴木さんでいいですよ。一口だけ」

そう言うと、店長さんは苺のカップを手に取り、口をつける。

「うん。いいですね。リフレッシュできた気分です。鈴木さん、ありがとうございました」

そう言っただけで、店長さんは肩の凝りをほぐすように腕をまわす。ずいぶん疲れているようだ。

「店長さん、疲れてるんでしょ？」

「ええ……まあ……」

苺は急いで立ち上がり、店長さんの後ろに回って肩に手をかけた。

「鈴木さん？」

困惑している店長さんに構わず、苺は肩を揉み始める。

「おおっ、やっぱり凝ってるですねえ」

「そうですか？」

「店長さんのパソコンの中には、そんなに仕事があるんですか？」

苺は真面目に聞いたのに、店長さんはおかしそうに笑い出した。

「年末ですからね」

店長さんはコーヒートを啜る。

苺は店長さんの肩をほぐすのに、しばし熱中した。

目の前にある店長さんの背中からは、苺を虜とりこにするようないい匂いがする。

店長さんって、どうしてこんなにいい匂いがするんだろう？ かぷっとかぶりつきたくなる。

「鈴木さん、もういいですよ。鈴木さんのお茶が冷めてしまう」

「そんなこといいですよ。……ねえ店長さん、少しは疲れが取れましたか？」

苺は後ろから、店長さんの顔を覗き込んで尋ねた。

「ええ。充分取れました」

店長さんはそう言いながら、肩に乗っている苺の右手に自分の手を重ねてきた。その触れ合いに、心臓がドキンと跳ねる。

「鈴木さんの手には、癒いしの力があるようですね」

「い、癒し？ そんな力なんかありませんよ」

「ですが、私は感じるんですよ」

店長さんは苺の手をぎゅっと一度握りしめてから離れた。

「鈴木さん、それを片づけ終えたら着替えなさい。今日はこれで帰ります」

カップをトレーに載せて、給湯室に向かおうとした苺は、店長さんの言葉に驚いて振り返った。

「も、もう帰るですか？」

だって、まだ四時なのに。

「ええ。行くところがありますからね」

……またか？ 今度はいつたい、どこに行くというのだろう？

「でも、まだ給湯室の掃除が終わってないんですよ。もう一時間待ってくださいませんか？」

「それでは……二十分だけ待ちましょう。二十分で終わらせなさい」

高圧的な口調で言われ反抗できない。苺は慌てて掃除を再開し、なんとか二十分で終わらせた。

「どこに行くのか、今度も教えてくれないんですか？」

店をあとにしてショッピングセンターの中を歩きながら尋ねると、店長さんはじっと苺を見つめる。何か企んでいる眼差しだ。

「聞きたいですか？」

苺は店長さんを見返し、数秒考えてから口を開いた。

「店長さん、教えたいですか？」

店長さんはふっと笑う。

「教えたくありませんね」

やっぱり、そう言うと思ったよ。

「じゃあ、いいです。また目的地に着いてから、苺はびっくりすることにしますよ」

店長さんには驚かされてばかりだから、耐性がついてきたと思う。

そんなに簡単には、びっくりしないぞ。

自信たっぷり、苺はにやついた。

6 手痛いロス 爽

「店長さん、どこかに行くんじゃないかなかったですか？」

ワンルームマンションの駐車場に車を停めたところで、苺が怪訝そうに尋ねる。

肩すかしを食らった気分なのだろう。だが、ここは単なる通過地点だ。

爽は少し離れた場所に停まっているもう一台の車を確認すると、その車の運転手と視線を合わせた。運転手は爽を見て頷いたが、爽はあえて、なんのリアクションも返さなかった。まだ苺に気づかれたくない。

運転席のドアを開けて、爽は助手席に座っている苺に声をかけた。

「行きますよ」

それだけ言って車を降りる。苺はさらに戸惑ったようだ。

「行きますよって……部屋に帰るんですか？」

苺も車から降りて、爽と並ぶ。

「ええ。着替えなければなりませんから」

爽はマンションのエントランスに着くと、中に入るよう苺を促した。

「着替え？」

苺が、いま着ている赤っぽい厚手のセーターとチェックのスカートを見る。

「これじゃ駄目なんですか？」

そう言った苺は、何か思い当たるフシがあつたのか、ハツとした顔をした。

「あ、あの……店長さん、もしかして行くところって……」

苺はひどく顔を強張らせている。どうやら、目的地を予想したようだが……いったいどこに行くと思つたんだらうか？

「それは内緒のままでいいと、おっしゃいましたよ」

「まあ、そう言ったですけど……」

エレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押す。

「苺、ひとりで留守番してるですよ」

予想外の台詞に、爽は眉を寄せた。

「鈴木さん、急にどうして？」

「なんかその……行かないほうがいいかなあって……」

尻込みし始めた苺の心中がわからない。

「とりあえず部屋に行きましょう」

爽は苺の背中を押して、部屋に向かった。

「どうしても行かないとおっしゃるんですか？」

ソファにちょこんと座った苺を、爽は見下ろした。実を言うと、内心は苛立っている。早く着替えさせないと、間に合わなくなってしまう。

「だ、だって……」

目的地を教えれば行く気になるだろうが、ここでバラしては面白くない。いや、もしかすると目的地を知ったら、いまよりもっと嫌がるかもしれない。

「店長さん一人で行ってきてください。苺は留守番……」

「鈴木さんが行かないのであれば、中止しますよ」

腕時計で時間を確認しつつ、もういつそ取りやめるか、それとも無理やりにも連れて行くかと迷う。

「えっ？ け、けど……」

苺はソファから立ち上がり、慌てて言う。

「それだと、店長さんのおばあちゃんが、がっかりしますよ……」
爽は眉をひそめた。それを見た苺は気まずそうに顔を歪める。

「祖母？ どうして祖母が、がっかりするのですか？ ……ああ、祖母の家に行くと思ったんですね？」

「べ、別に、そ、そんなことは……その……」

しばらくすると、苺は、諦めたように「ごめんなさい」と謝る。

「謝る必要などありませんよ」

しよげている苺を見て、爽はくすくす笑った。

「だって……クリスマスプレゼントのことがあるし……」

プレゼント？ あ、ああ、なんだそういうことか……

「鈴木さん、安心してください。これから行くところは祖母の屋敷ではありませんよ」

「そ、そうなんですか？」

「そうですよ。まったく貴女はいつも早合点して……」

いや、もうぐだぐだ言っている場合じゃない。

「ほら、かなり時間をロスしてしまいましたよ。鈴木さん、急いで着替えてください」

気持ちを切り替えた爽は、苺を急かした。

「ああ、そうだ。あつたかそうなコートを持っていましたよね？ それも忘れないように」

「な、何を着てればいいんですか？」

やれやれ、苺には任せておけない。

爽は苺のクローゼットに歩み寄った。

さっさと出かけないと、せつかくの計画がおじちゃんになる。一分でも遅れてしまったら、もう取り返しはつかないのだ。

爽はざっと苺の服を選び、ベッドの上に置いた。

「これでいいでしょう。私は洗面所で着替えてきます。とにかく時間がありません、急いでください」
苺をさらに急かし、自分の着替えを手にして洗面所に飛び込む。爽は手早く着替えた。

「着替え終わりましたか？」

ドアの外から声をかける。さすがにまだ早すぎるかと思ったのに、中から「はい」という声が返ってきて爽は驚いてしまった。

まったく苺ときたら、支度だけは早いのだろうか。

「行きますよ」

腕を掴んで外へ連れ出そうとすると、コートを抱えた苺は、「バ、バッグ」と叫び、いつも持ち歩いているバッグを掴んだ。

身なりさえ整っていれば、苺が何を忘れようと大きな問題はない。

苺を急かし、マンションを出る。

先ほどの車は、エントランスの前に横付けしてあった。

私たちが出てきたらすぐに乗れるようにと、はからってくれたのだろう。

夕方は道が混雑するから、おそらく到着はギリギリになるだろうな。

「爽様。お早く」

運転手に早く乗るように急かされる。

「ああ、ご苦労」

後部座席のドアを開けて、先に苺を乗り込ませた。

彼女はこの事態にひどく戸惑っているのだろうが、爽と運転手が焦りを露わにしているからか、素直に従ってくれる。

「間に合いそうか？」

すぐに車が走り出し、爽は運転手に話しかけた。

「はい、なんとか間に合えます」

「うむ、頼む」

座席にもたれると、苺にちよいちよいと腕を突かれた。

「こ、この車で行くんですか？ 店長さんの車で行くんだと……」

驚いている苺に、にやつきそうになる。

だが、にやついている場合ではない。間に合わなければ、そこで計画は失敗に終わってしまう。

爽は時間になって仕方がなかった。

しばらくすると、苺が爽のほうにもたれかかってきた。

なんだ、おとなしいと思ったら、寝ていたのか？

どこに行くのかと、さんざん気にしていたくせに、眠ってしまうなんて……
だが、このほうが都合がいい。目的地に到着したとき、とんでもなく驚くだろう。
無防備な苺の寝顔を見つめた爽は、くすりと笑い、彼女の頬をそつと突いた。

7 悪くない心変わり ー苺ー

ぐっすり眠り込んでいた苺は、身体を揺さぶられ、なんとか目を覚ました。

「鈴木さん、降りますよ」

降りる？ ああ、車に乗ってたんだっけ……

「は、はいです。ついたられますか？」

どこに着いたんだらう？ と考えながら、大あくびをする。

「まだですよ」

まだ？

「そ、そうなん……あれっ、ならなんで車を降りるんですか？」

車から引きずり降ろされながら、苺は尋ねた。

外はものすごく寒く、ぶるっと体が震える。けれどおかげで目が冴えてきた。

「では爽様、お気をつけて」

「ああ、ありがとう」

苺が眠りかけている間に、いったいどこにやって来たんだろう？

苺は目をこすり、周囲を確認しようとしたが、その前に店長さんに腕を取られて、強引に歩かされてしまう。

「店長さん、ここはどこなんですか？ あっ、苺のバッグ」

「私がついていますよ」

「苺、自分で持つですよ」

「私がつっておきますよ。鈴木さんはまだ寝ぼけていらつしやるようですし、そこらに落ととしては困るでしょう？」

「はあ」

反論できず、曖昧あいまいに返す。

苺は店長さんに腕をとられたまま、周囲を眺め回した。

おや、ここって？ 周囲を歩いているひとたちは、みんな大きな鞆を持っているし、お土産屋さんが並んでいる。駅なのかな？

「店長さん？ こんなところに来て何を……？」

「鈴木さん、さあこちらですよ」

店長さんは苺にはまるで構わず、ぐいぐいと引っ張っていく。

さすがの苺も、ここがどこだか気づいた。

く、空港じゃないか！

アワアワしている間に、苺はゴージャスなソファに座らされた。店長さんが隣に座る。

こっ、この部屋……なんなんだ？ ほかに人も人はいるけど、それほど多くない。

制服を着た綺麗なお姉さんが、飲み物なんかを振舞ってくれたりして……

飛行機には乗ったことはないが、ここが普通の待ち合い室じゃないことくらい苺にもわかる。

この高級な雰囲気は普通じゃない。いや、そんなことより……

「あの、ここは？」

動揺いっぱい、苺は尋ねた。

「ラウンジですよ」

ラウンジ？

「あのー、まさかと思うですけど……」

チェックインカウンターってところで手続きし、ここにやってきたのだから……と、当然、飛行機に乗るんだよね？ 空港を観光しただけで帰るなんて、あるわけない。

ならば、苺はどこに連れて行かれるのだ。

ま、まさか、海外なんてこと……？

一瞬、背筋に冷たいものが走ったが、そんなはずはないと自分を落ち着かせる。

だってまだ、苺はパスポートを持っていない。

「いったい、苺をどこに連れて行くつもりなんですか？」

店長さんの腕を大きく揺さぶりながら問い詰めたが、「着いてからのお楽しみですよ」としか答えてくれない。

ほ、ほんとに、これから飛行機に乗るってのか？

「さあ、時間のようです。鈴木さん、行きましょう」

「で、でも……でもですね。い、苺は」

「大丈夫ですよ。私がついているんですから」

そんな、自信満々に言われても……

「い、苺、空飛ぶ乗り物より、新幹線とかバスとかですね……」

「苺！ 行きますよ、立って下さい！」

びっくーん！

鋭い声にびびった苺は、口を閉じてさっと立ち上がった。

連行される犯人のような歩みで辿り着いた先は、もちろん飛行機の中だった。

苺は生きた心地がしなかった。

「と、飛ぶですか？ 飛ぶですか？」

窓から見える外の風景が動き出したことに気づいた苺は、悲鳴のように叫んだ。

これからビュビューンとスピードが増して、ゴゴオオッと空めがけて飛んでゆくのか？

「まだですよ」

隣に座っている店長さんは、苺のほうに目もやらずに言う。

いま現在、飛行機は後方へ動いている。

ま、まさか、バックしたまま飛ぶんじゃないよね？

「いつ飛ぶんですか？ 前に向かって飛ぶんですよね？」

「鈴木さん、少し落ち着きなさい。恐れることなどありませんよ」

店長さんは、少々呆れながらもなだめてくれる。けれど、苺は半べそで右隣に座る店長さんを睨んだ。

なんでいま、苺は飛行機なんてものに乗ってるのか……

「店長さんはなんでも突然すぎるんですよ。苺は飛行機に乗るなんて、これっぽっちも聞きちゃいませんでしたよ」

「聞かないとおっしゃいましたよ」

「飛行機に乗るだなんて、思いもしなかったからですよ」

そのとき飛行機がゆっくと向きを変えた。今度はぐんぐん前進し始める。

いよいよかと、苺はごくりと唾を呑み込んだ。緊張から肘掛けを掴む手に力がこもる。その手を

店長さんが「大丈夫ですから」と言っ、握りしめてきた。

苺は藁にもすがる思いで、店長さんの手をぎゅっと握り返す。

「鈴木さん、どうしてそんなに恐れるんです？」

「おっ……」

落っこちるかもしれないからですよ、と言おうとした苺だが、そんな不吉なことを口にしたら、本当に落ちるかもしれないと思い、やめた。

「落ちはしませんよ」

店長さんの言葉に、苺は顔を強張らせ、きゅつと身を縮めた。

「な、な、な、なんで言うんですかあ〜」

「気にしすぎです」

苺はふうつとほつぺたを膨らませた。鼻の頭に皺を寄せて、ふいっとそっぽを向く。小さな窓から外を見ると、飛行機は大きく旋回し、景色ががらつと変わっていた。

アナウンスが聞こえ、機内が暗くなった。どきりとしたところで、凄まじい轟音が響き始める。固まっていると、ぐんと身体が重くなり、背もたれに押しつけられたような気がした。

「うおおおおお……」

自然と「お」を連発してしまう。

右手をがっちり握ってくれている店長さんの手の中で、苺は拳を固める。

「うっくくく……」

身体を押しつけてくるGに耐えていると、はつきりと、ふつと身体が浮く感覚がした。う、浮いたっ！

苺は恐怖を忘れて、急いで窓の外を見た。

「マ、マジですかあ〜？」

見事な夜景だ。無数の光が輝いている。

そして圧巻なのは、オレンジ色のライン。

「店長さん、あのオレンジ色のラインは車の灯りですか？」

不思議い。

くっくつという笑い声が聞こえ、苺は店長さんのほうを振り返った。

「なんで笑うんですか？」

「いえ。先ほどまであんなに駄々をこねていたのに……ずいぶんとはしゃいでいらつしやるので」

苺はきゅつと眉を寄せた。

「だって苺、いま空にいるんですよ」

普段では味わえない体験をしている最中なのだ。そりゃ興奮もする。

「飛行機に乗っているのですから、空を飛ぶのは当たり前ですよ」

当たり前か……確かにそのとおりだけどさ、そんな身も蓋もない言い方をしなくても……

「……夢がないですよお」

不満を感じてぶつぶつと呟く。

「もう怖くはないんですか？」

顔をしかめた苺は、店長さんに握られている右手を、そのまま自分の胸に当て、うーんと考え込んだ。

「感動してるし、ドキドキウキウキしてますけど……怖い気持ちも残ってるかも」

「その反応は、もつともだと思えますよ」

店長さんは、苺のほうにぐっと身を乗り出してきた。そして苺と顔をくつつけるようにして窓の外に目を向ける。

飛行機はずいぶん高いところまで上がったようで、地上はぼんやりとしか見えない。

「昼間だと、もつと景色を楽しめたのですが」

「夜の飛行機も悪くないですよ。すつごく幻想的です」

鉄の塊かたまりが空を飛ぶつてことが理解できなくて、乗るのが恐かったんだけど……

この体験ができてよかったと、いまは心から思う。

苺は店長さんに、にこつと笑いかけた。

「なんですか？」

「ううん。ただ、店長さんに、ありがとうって言いたくて」

店長さんは困ったような表情をしている。苺はなんとなく照れくさくなり、すでに真っ暗になった窓の外に再び目をやったのだった。

8 詰め込まれた言いたいこと 〈爽〉

「お待ちせいたしました」

頼んでおいた飲み物を、客室乗務員が持ってきてくれた。

苺はオレンジジュース、爽は紅茶だ。

先にオレンジジュースを受け取り、苺に渡す。

「ありがとうございます」

苺はなぜか小声でお礼を言う。どうやら緊張しているようだ。

客室乗務員相手に、どうして緊張するのか？

乗務員が立ち去った途端、苺は肩の力を抜いた。そしてオレンジジュースを一口飲み、「美味しい」と感激した声を上げる。

「飛行機つてすごいですね。こんな美味しい飲み物まで出てくるなんて、びっくりですよ。店長さんの紅茶も美味しいですか？」

まだ口にしていなかった爽は、口を潤うるおす程度に飲んでみた。普段飲んでるものほどではないが、悪くはない。

「美味しいですよ。それなりに……」

「それなりに、ですか？」

からかうように言われて、爽は苺の鼻をつんと突ついた。

そんなことをされるとは思っていなかったらしい苺は、「わわっ」と驚く。面白い。

爽は改めて、苺との関係を考える。

言動のおかしな彼女を気に入ってしまい、常に自分の手元に置いている。けれど、自分自身が、

苺をどういふ存在と捉えているのかよくわからない。

女として意識しているかという点、微妙だし……

なんせ、苺には色気がない。先ほどの離陸のときのリアクションにしたって、乙女としては○点だ。……なのに、子どもとも思えない。

色気がないくせに、思わぬところで私をドキリとさせる。

苺について黙考していた爽は、顔をしかめた。

考えれば考えるほど、わからなくなってくるな。

「店長さん」

ゆっくり紅茶を味わっていると、苺に声をかけられた。

「なんですか？」

それにしても、クリスマスのある日、互いを名前で呼ぶことにしたはずなのに、結局、『店長さん』『鈴木さん』と呼び合っている。仕事中はそうでなければならぬが、プライベートでは名前で呼ぶように決めたのに……

なんだろうな。違和感があるというか……

確かに、『爽』と呼ばれたときもあるが、『店長さん』のほうがしつくりくるときもある。

自分が苺を呼ぶ場合も同じだ。『苺』と呼びたいときもあるが、『鈴木さん』と呼ぶほうがしつくりくるときもあるのだ。

つまりはふたりの間には、まだ微妙な距離がある……そういうことだろうか？

「こいつは、どこに向かって飛んでるんですか？」

「はい？」

苺の問いに、爽は面食らった。いまさらそんなことを聞いてくるとは……

「知らなかったんですか？」

「だって教えてもらってないですよ」

「行き先は表示してあったでしょう？ それにアナウンスでも、何度も繰り返していましたよ」
苺は首を横に振る。

「そんなもの、見ても聞いてもいなかったし」

そうか、隙あらば逃げ出そうとしていたからな。ほかのことに気が回らなかったのだろう。

「お食事をお持ちいたしました」

かしこまった声に顔を向けると、機内食が運ばれてきた。まず先に、窓際に座っている苺の前に置かれる。

爽は噴き出しそうになった。苺ときたら、目を見開いて驚いている。今にも目玉が飛び出しそうだ。

「いただきますようか？」

まだ驚いて固まっている苺に声をかけると、目を見開いたまま爽を見つめ、手で覆った口元を爽の耳に寄せてきた。そして、「びつくりですよ」と見ればわかることをわざわざ口にする。

「飛行機って、サービスがいいんですね」

そう感想を述べるが、サービスがいいのは、この席がプレミアムクラスだからだ。

飛行機に乗るのが初めてでは、客席のグレードがわからないのも当然だ。

これまでにエコノミーを体験したことがあったなら、ラウンジに入ったところで気づいたのだろうが……

これほどサービスがいい理由を教えてやるべきか迷ったが、言わないことにした。

知らないままでいたほうが面白そうだ。だいたい、自分とともに飛行機に乗るのであれば、必ずプレミアムクラスになるのだから、エコノミーを体験する機会はない。それに苺が自分以外の者と飛行機に乗ることなどなくていい。

機内食は、これまでになく美味しく感じた。苺と一緒にだからだろう。

苺はどれを食べても美味しいを連発する。もぐもぐ食べている顔はそれはもうしあわせそうで見ているこっちまで満足できる。

「ふーっ、満腹満腹」

レディにあるまじき仕種^{しぐま}で、苺は満足そうにお腹をさする。

「それはよかった。ホテルに着いたら、食事を頼もうと思っていたのですが……必要ないですか？」

「そうですね。これだけ食べたなら、もう必要ないですよ。それよりホテルに泊まるんですか？」
瞳をキラキラさせて聞いてくる。

「ホテルに泊まれるのが、そんなに嬉しいんですか？」

なぜか苺はうーんと考え込む。

気になった爽は「鈴木さん？」と答えを催促^{さいそく}した。

「情報を掴んだのが嬉しいっていうか……まあ、そういうことですよ」

「情報……ですか？」

「はいですよ。行き先も何も知らされずに飛行機に乗っちゃって、苺にとっちゃ謎ばかりですからね。情報を掴んだら、やった！ って思うですよ」

片腕を振り上げながら言う。

「ねえ、店長さん」

「なんです？」

「苺のこと、スキーに連れてってくれるんでしょう？ つい最近、スキーに行く約束したし、あったかそうなコートを持って行きなさい、なんて言うし……」

爽は苺に笑いかけた。

すでに目的地を口にする必要がないのは明らかだ。

「楽しみですか？」

喜びの反応を期待して問いかけたら、意外にも苺は不服そうな顔をした。

「スキーに行くことになるなんて、思ってもみなかったですよ。さすがにこれはやりすぎです、店長さん」

叱^{しか}るように言われて驚いた。そんな常識的なことを言うなんて、苺らしくない。

「びっくりさせたかったんですよ。喜んでもらえると思って……」

「なら、もっと近場でよかったのに。遠すぎですよ」

「どうせ連れて行くのなら、お薦めのスキー場にお連れしたかったんですよ」
「近場にはお薦めがなかったんですか？」

「これから行くところが、一番近いお薦めの場所なんです」
突然、苺が押し黙った。彼女はしばし爽の瞳を覗き込んでいたが、やがて口元がヒクヒクと痙攣し始める。

「鈴木さん？ どうしました？」

「ちよつとぼかし、眩暈を感じたですよ」

苺は頭を押さえ、それから爽をじーっと見つめてきた。

「何が言いたいんです？」

「……何も言いたくないですよ」

「ですが、何か言いたそうな目をしていますよ。気になるので、はっきりと口にしてもらえませんか？」

眉を寄せた苺は、なぜかスーッと息を吸い込み、次に両手を口に持ってきて唇をすぼめ、風船を膨らませているようなジェスチャーをする。

「なんです、それは？」

見えない何かを手しているふりをする苺に、爽は眉を寄せて尋ねた。

「ここに、言いたいこと全部詰めたんですよ」
は？

「それくらい、言いたいことがいっぱいあるってことですよ。全部口にしたら、苺はへとへとになるですよ。……は？」

苺は、言いたいことが全部詰まっているらしい両手のものを差し出し、爽の膝に載せる真似をする。

「これ、どうすればいいんです？」

「好きにすればいいですよ。なんか疲れちゃったです。まだ着かないですか？」

シートに深くもたれた苺は、大きなあくびをした。

「あと二十分ほどで着きますよ」

爽は自分の膝を見つめた。もちろんそこには何も無い。だが……

苺の言いたいことが全部ここにあるってわけだ。

笑いが込み上げてきた。

全部口にしたら、疲れてへとへとになるとは……

声を出して笑っていると、苺もつられたのか、くすくす笑い出した。

爽は笑いながら、自分の膝に手を伸ばした。するとそれを苺が邪魔する。

それから爽と苺は、目に見えないものでさんざんふざけ合った。